

河合隼雄追悼記念シンポジウムを振り返って

岡田 康伸

河合隼雄先生が2006年8月17日に倒れられ、2007年7月19日に逝去された。2009年が3回忌に当たるので、この1年間に、記念シンポジウムを催し、京都文教大学と先生との関係を明確にし、先生を偲びたいという趣旨が、この「河合隼雄追悼記念シンポジウム」である。幸いに、4回の企画がなされ、多方面から、河合先生を偲び、涙を新たにし、先生の多彩な活躍を振り返り、その偉大さをいまさらながらに思い返すことが出来た。毎回の詳しい内容は名取氏および高石氏によって以下に記されている通りであるが、ここでは要約を述べたい。

第1回目がシュピーゲルマン先生をお迎えしてのシンポジウムになったのは、まさに、なにか布置されていたようで、河合先生を偲んでの企画にふさわしいスタートになった。まさに、このように布置されていたことは河合先生が日本の臨床心理学のリーダーとして、位置づけられていたことを暗示していたと言えるかもしれない。

2回目のシンポジウムはまさに、河合先生と本学とが深い関係にあったことを示すものであった。本学の臨床心理学研究科の1期生は10年を経た今、日本の臨床心理現場で、中堅になろうとしている。今後の日本臨床心理の発

展が期待されるものである。様々な団体との交渉やときには軋轢もあるなか、これに負けずに、これらに耐えながら、新しいものを産み出す力を蓄えてきていると信じたいものだ。時代が心理臨床の必要性を認め続けてくれている限り、どのような困難があろうとも打ち勝っていってくれると思う。しかし、少しでも変なエネルギーを払わなくてもよいようにするのが、先輩である我々の役割ではないかと考えている。

3回目は河合先生を記念しての植樹祭にふさわしく、日本の心理臨床関係の4団体の代表によるシンポジウムだった。少しお祭り気分であったが、行事が重なり、少々観客が少なかったのは残念であった。

4回目は鶴見和子先生と本学との関係も深くあることを示し、かつ、本学が大学としての知的財産が重厚にあることを示すチャンスとなった。本学の人間学研究所の支援もあり、鶴見・河合両先生の知り合いであるボスナック先生をお迎えして「宗教」をテーマにシンポジウムが出来たのは将来を見据えた企画であったと思う。今後も河合先生と京都文教大学との関係を考えていく中で、本学が日本の心理臨床の発展に寄与できればと思う。